尾張の御嶽講・高針心願講の歴史と現在

小林　奈央子

はじめに――心願講と岩崎御嶽山

木曽御嶽講（以下、御嶽講）とは、岐阜県と長野県にまたがる木曽御嶽（三、〇六七㍍）を霊山として崇め、登拝する同信者講組織である。御嶽講は、江戸後期に木曽御嶽を大衆開放した、尾張国の覚明（一七一八―一七八六）と武蔵国の普寛（一七三一―一八〇一）という二人の行者の出身地にちなみ、特に東海や関東で盛んに組織されてきた。本論文で取り上げる心願講も、御嶽講の一つの系統であり、愛知県東部を中心に各所で立講されてきた。

心願講の開祖は、名古屋古出来町の明寛（俗名：丹羽宇兵衛、一八二二―一八八〇）と名古屋門前町の明心（俗名：倉知茂兵衛、一八三六―一九一一）である。そして、この二人の開祖に先だって、講の基盤を作っていたのが、明心の父である古伯（俗名：倉知茂兵衛、一八〇八―一八六〇）であった。

明寛は小間物屋を営み、尾張・三河で行商をしていたと伝わる。一六歳で名古屋熱田の御嶽行者・儀覚（俗名：武藤清六、一七六九―一八四一）と初めて木曽御嶽に登拝したとされる。この儀覚が、普寛の直弟子である広山（？―一八三一）から行法を授けられていることから、心願講は東海地方にありながら、実際には関東の普寛の流れを汲み、主要な行法については、普寛系のものを継承していることが近年の研究でわかってきている。[1] 一方の明心は、古伯を父に呉服商を営む家に生まれ、明寛より一四歳年下であった。

明寛と明心は万延元年（一八六〇）、自らが居住する地域とは少し離れた郊外の岩崎御嶽山（現在の愛知県日進市岩崎町、一三四㍍）を開山した。開山以降、岩崎御嶽山は心願講の中心的な拠点となり、「岩崎御嶽に三度登れば、木曽御嶽に一度登ったご利益がある」とされる霊場となった。

岩崎御嶽山の由来を記す『岩崎御嶽山縁起』（倉知家所蔵）[2] によると、文政九年（一八二六）、古伯が数えで一九歳の時に御嶽登拝を毎年の行事とし、その後、天保元年（一八三〇）、二三歳の時に心願講を組織し、同年八月一六日に三七八名の登山者を引き連れ徒歩で登拝したとある。すなわち、心願講の講祖は明寛・明心となっているが、実質的な心願講の基盤を作ったのは、古伯であったと考えられる。そして、明寛は一九歳のときに、古伯のもとで「先達として大勢を倶して（木曽御嶽に）登山」し、明心は一一歳のときに先達として、父古伯の御嶽登拝に随行したという。

同縁起によれば、明寛・明心の二人は、「吉田屋（倉知家の屋号）の倅兄弟」として万延元年（一八六〇）閏三月に西国三十三番札所巡りをしており、その際、南寺町の徳林寺に提出した「往来一札」が倉知家に

残る。巡拝の道中、明心が覚明行者の霊夢を受けて「尾張国岩崎瀧の山と云ふ霊山あり此の山に御嶽大権現を勧請すべし是諸人信仰及び御山繁栄福寿増長をとらすべし」と命ぜられ、[3]それに従って明寛とともに岩崎に御嶽山を開いたという。そして、古伯は岩崎御嶽開山の年に亡くなった。

現在も岩崎御嶽山の社殿前には、開山の年である「萬延元庚申年」と刻まれた石柱がある。同石柱の別の石面には「心願講惣同行中　勧進者出来町　大和屋宇兵衛」と勧進者として明寛の俗名が入っている。また、万延元年に岩崎御嶽山に建立された石造物として、心願講猪ノ子石（現在の名古屋市名東区猪子石）が奉納した「金剛明王像」、心願講春日井郡瀬戸川村（現在の尾張旭市）が奉納した「岩戸大権現碑」、矢田村（現在の名古屋市東区矢田町）心願講中が奉納した「日大権現碑」、心願講新居村（現在の尾張旭市）が奉納した「大黒天像」などがあり、開闢の時点ですでに東尾張を中心とした各地に心願講が結成されていたことがわかる。

その後、明寛・明心は、岩崎御嶽山の開山以前、安政五年（一八五八）にすでに開闢している岩作（やざこ）御嶽山（現在の愛知県長久手市）と岩崎御嶽山の二つを拠点として、尾張・三河での布教活動を精力的におこなった。明寛に関しては、小間物の行商も兼ねながら三河方面へも足しげく布教に通っていたという伝承が残る。明心は、講の組織づくりに力を注いでいたようで、勤行集の編纂に関わる史料や講員名簿などが、子孫である倉知茂明氏のもとに残る。のち明治五年（一八七二）になると、明寛の弟子、明直によって古瀬間御嶽山（現在の豊田市古瀬間町）が開かれ、岩崎、岩作、古瀬間の三つが尾張・三河地域の心願講の中心拠点となった。

本論文では、心願講の本拠地である岩崎御嶽山から二・五キロほどの所に立地する、高針御嶽山を霊場とする高針心願講（名古屋市名東区高針）の歴史と現在について、筆者が近年行っている、同講所蔵の史料調査および現地調査から明らかにする。

高針心願講の立講と高針御嶽山の開山

岩崎御嶽山からほどない名古屋市名東区高針に高針心願講はある。猪高村高針前山の浅井勝次郎が、大正一〇年（一九二一）に組織した。勝次郎は、明治後期から昭和初期にかけて、尾張・三河の心願講を主導した林一心（俗名：林甚太郎、一八七四－一九四三）を師として行法を伝授され、のちに寛開霊神の号を授かった。林一心は神光院と号する本山派修験で大峯山喜蔵院に属する心願講心巴講（名古屋市東区手代町）を主管し、大正九年（一九二〇）に、心願講副大社長となった人物である。高針心願講が所蔵する林一心の手になる『佛窟開創縁由』（昭和十六年）には、巻末に心巴講の枝講の講社名があり、勝次郎が講長として率いた高針心願講の名も見える。勝次郎は一心に師事しつつ岩崎御嶽山や岩作御嶽山で修行を重ね、自宅に神殿を構え、月並祭をおこなっていた。神降ろしの巫儀である御座を立て、村の人びとの病気の相談や悩みに応え、加持祈祷をおこなっていた。[4]

戦後、高針心願講は自らの修行の拠点の整備を進めていく。当時、高針地区では、高針開墾組合が結成され、田畑と山林に覆われていた高針の地の開拓が進められていた。諸説あるようであるが、高針という地名

は「高き地を開墾（はり）たるを高治（たかはり）」といったことからとされ[5]、また、江戸後期の『尾張徇行記』には、「此村ハ名古屋ヨリ末森村を歴て通スル所ノ信州飯田街道筋ニアリ、四瀬戸ニ分ル北嶋古谷島森嶋今前山ト云又東ノ端ヲ新屋敷ト云一村ツヽキノ所ナリ」とある[6]。信州飯田街道とは名古屋城下から信州飯田に至る道で、輸送馬（中馬）の中継点であった三河の足助につながる脇街道の一つが高針を通っていた（高針街道）。ここにあるように、江戸時代中頃までは、北嶋、古谷島、森嶋、新屋敷の四つの島（嶋）、すなわちシマ（集落）で一村を形成していたようであるが、その後、水害や戸数の増加などから森嶋が「前山」と「西山」に分かれ、古谷は、「東古谷」と「西古谷」に分かれ、計六つのシマができ、今に至っている[7]。

そうした高針地区の開墾事業をめぐる活動の中で、高針心願講の霊場開設の動きも進んだ。現在の猪高緑地の南端、極楽山（現在の親鸞山、標高一一一㍍）に御嶽の神々が勧請され、昭和二十四年（一九四九）十月、高針御嶽山として開山された[8]。

「高針御嶽山開設の事」（高針心願講所蔵）には、「高針東方極楽山上」に高針御嶽山が開設された経緯が記されている。以下挙げてみる[9]。

高針御嶽山開設の事

場所高針東方極楽山上

右開設に当り兼て依り心願講高針講員は
高針地内に行場と定む可く御嶽大神を御嶽大神を
御祭り上げ度き意向の時高針開墾組合で
開墾記念事業として何様かを祭り度き
考案中なれば講員に合意あれば相談の上へ
御嶽大神を祭る気は無いかとの事を当時
組合顧問浅井兵馬氏依り話し有り
願ひ叶ったりで早速話し進めて戴き幸ひに
して急ぐ話しなりしは時の組合長加藤時三郎
副組合長佐橋信壽両氏始めとし組合役員
及組合員諸氏の協力大なるものより開山と進む
事が出来て講員一同嬉び又大なるものの中に
昭和二十四年八月着手今年拾月八日に
初の祭り事目出度行へり其の当日
組合、講員の立場の互意からとて不備の
点出ずる為後難を無くする故へに合意相談
の上へ今後祭り事は御嶽講員主體とし
一切をまかせ祭事に誠心助力に当る事を
定めたもの後年における役員諸氏及組合員
は心安らかに地元は勿論字人等の幸ひを祈念し
開墾組合記念事業を以てす此の山を益々
栄後世に残す記念事業を次々と
御協力あって記録を綴らるやう書き残す

毎年の祭事

大祭とし　春四月

秋十月　吉日にす　印

以上のように、心願講の講員を中心に、さまざまな人びとの協力があって、高針の極楽山に鳥居と社殿が出来上がった。右に続く史料には[10]、高針開墾組合の組合長、副組合長、顧問のほか、高針の各嶋（シマ）ごとの役員、そして、先達浅井勝治郎（ママ）、副先達大鐘明など高針心願講の役員の名前が続く。また、「綴参」と付された史料には、「開設当時備品と其の他」として次のようにある。

一、堂購入貳棟
一、佛體千手観音　一
一、中央大日大聖不動明王　一
一、弘法大師　一
一、其の他の小備品　二、三種

このように、社殿に勧請された御嶽大神のほかには仏像が安置された。昭和二十四年八月に開山に向け始動、九月に起工となり、その際に記された「高針極楽御嶽山開設奉願帳」（高針心願講所蔵）では、発起人が高針御嶽心願講、後援者として高針開墾組合および篤志者と記載されている。開山の中心的な役割を担ったのは心願講の講員であるが、地元の人びとからの理解と協力を受けて成立したことがわかる。翌月の十月八日十時から開山式がおこなわれ、その折の引札には、「余興　宝さがし」との記載も見える。ここから推察できることは、高針心願講の行者たちが、自らの行を厳修する地として開山しながらも、閉鎖的な霊場ではなく広く地元の人びとにも開かれた場所としようとしていることである。この開山式以降、「高針御嶽山開設の事」の末尾にあるように、春四月と秋十月の吉日に大祭がおこなわれるようになった。また、開山と同じ年に極楽山頂に御嶽大神碑、翌二十五年（一九五〇）二月に、浅井錠太郎ほか親族一同によって高針心願講初代の浅井勝次郎、すなわち寛開霊神を祀る霊神碑が建立された。

その後、高針御嶽山は昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風による被害などで、社殿も参道も荒れてしまった。そのため、社殿の再建と参道の整備が急務となり、昭和四十五年（一九七〇）一月より講員が主体となって自らの手で社殿の再建および参道の修繕を開始し、同年五月に完成した[11]。この再建で発起人となったのが、高針心願講第二代、高針東古谷の大鐘明（一九一一―一九九二）、のちの明東霊神である、大鐘明は、父親の病気を治してほしいという祈願のため、大正十五年（一九二六）に高針心願講の信者となった。その後、神降ろしの御座で、神霊を自身に憑依させる憑坐役の中座となり、講の発展のため尽力した。高針心願講では、毎年節分に近い日曜日に星祭がおこなわれているが、この星祭を高針心願講の祭事として、「鎮宅霊符神法」とともに講社にもたらしたのは、林一心のもとに通って宣託を受けた明であるという[12]。

高針心願講所蔵『佛窟開創縁由』

高針心願講では現在、第四代先達の大鐘和久が中心となって、修行などの宗教実践はもちろんのこと、さまざまな祭事、行事を積極的におこなっている。その中でも特筆すべきものが、木曽御嶽の王滝口里宮後方にある仏窟の再興とそれにまつわる祭事の復活である。先述したように、この仏窟の由来が書かれた『佛窟開創縁由』が高針心願講に所蔵さ

れている。この縁由は昭和十六年（一九四一）に林一心により書かれ、正本は佛窟内に納められ、副本三つは、それぞれ林一心、木曽王滝の旧修験胡桃澤光一、名古屋市東区黒門町の心願講心巴組福寿講の浅野清吉に渡された。[13]

林一心は先にも述べたように、本山派修験であり、大峯山喜蔵院末の心願講心巴講を主導して多くの枝講を取りまとめ、さらに心願講の副大社長となった人物である。彼が自らの来歴を述べた『林家　林一心由来記』の内容については、すでに関敦啓が詳細な報告をしているため、[14]ここでは概括するのみにしておくが、一心は明治七年（一八七四）生まれで、明治十四年（一八八一）、七歳で西加茂郡の福谷（うきがい）小学校に入学した。ところが同じころ大病によって生死の境をさまよった。医薬では治らず、父親が御嶽神社で、自分の子としてではなく、成長した暁には神様の守をする者にさせると約し、三七日（二十一日）間の願掛けをおこなうと、たちまち全快したという。その後、明治二十一年（一八八八）、十四歳のとき福谷の心願講の勤行に加わり勤行を開始し、行者として生きる道を選んだ。そのように一心が志した背景には、自分が「今日ノ健全モ神アル故」とし、神への祈願によって死の淵から生還できたことへの恩返しと、同じように苦しむ人々の救済を目指し発心したことがある。[15]

その一心が、最晩年に記したものが、『佛窟開創縁由』（昭和十六年）である。その冒頭には、以下のようにある。

昭和三年八月十九日ノ夜　心巴
講講長一心行者大峯山参
詣セラレ祈願圓満副行トシテ
名古屋市東區車道町四丁目
副講元三輪房次郎神前ニテ副講
元一柳十寸穂始メ青木吉次郎拾
餘名詣ヒ集ヒ般若心経一千巻
讀誦中御嶽山開祖普寛行者
心巴講副大先達寺田浅吉ノ霊媒
ニ御降臨座シ坐シテ誨（オシエ）テ曰ク信濃
國西筑摩郡木曽御嶽山王滝
口里宮后方ニ佛窟アリ薬師瑠璃
光如來十一面觀世音菩薩此二佛
ハ御嶽山座王權現御脇侍佛日光
佛月光佛此ニ佛ハ薬師瑠璃光如
來御脇侍佛鎮座ス

この記述によれば、昭和三年（一九二八）八月十九日の夜、大峯山で修行を終え名古屋に戻った一心らが、副講元の三輪房次郎宅の神前にて、副講元一柳十寸穂、青木吉次郎ら十余名と祈願円満の副行として般若心経一千巻を読誦していたら、寺田浅吉の霊媒（中座）に開祖普寛行者が降臨され、王滝口里宮の後方に仏窟があり、そこに薬師瑠璃光如来、十一面観音の二仏があり、この二仏が御嶽山座王権現の脇侍仏、日光仏、月光仏の二仏は薬師瑠璃光如来の脇侍仏として鎮座していると宣べたということである。

そして『佛窟開創縁由』ではさらに、普寛が、現在、剣ヶ峰（木曽御

嶽山の最高峰）に祀られた神鏡は大変由緒あるもので、医王如来の徳が高く、「五濁乱慢ノ下根ノ人ハ座王権現ト化シテ水火盗兵難及病患横死等諸難ヲ祓ヒ玉フ」とし、とりわけ眼病患者には、神歌を唱えて一心に祈願すれば必ず全治すると誓い、開創するよう神勅を下したとする。

以上のような、普寛による神勅を受けた一心たちは、直ちに王滝に向かい、地元に住む胡桃澤光一に案内を頼み、普寛が示した場所を探し求めたが、「所在鮮明ナラス」であるため、村の古老に聞いてみると、「五味澤」と称する場所と判明したが、案内はできないと言われた。その理由を一心たちが尋ねると、その場所へ行くと草木に触れるだけで悪寒を覚え、床に臥す人も数人いた。いまは皆怖がって誰一人として近寄らないという。そのため、その方向だけ指示してもらい、山渓を分け入り、木を伐り、いばらや雑草を刈りながら万難を排し、現場に到着すると巨大な岩窟が現れ、一同「恐懼感激ニ堪ヘズ」であった。そして、一心が中に岩窟内に入ると、普寛の神勅通り、「正面ニ三社前面ニ木像二軀安置シテアルヲ拝シ」た。そして、護摩供、経典読誦、応急施設をおこなって、今後は総員一心御山繁栄信者の拡大増進を誓って退下したという。その後、同志で諮って心願講心巴組と胡桃澤光一を共同管理として経営することに決め、参道の開設、窟内の様々な整備をして昭和四年（一九二九）初夏に竣工、同年七月二十九日に式典を厳修した。

『佛窟開創縁由』にはさらに、式典後、参拝者が増え、中には入口の柵の錠を切断し、（中のものを）盗み出そうとするおかしな人も来るため、協議して鍵は王滝口の胡桃澤光一の元にて保管し、胡桃澤もしくは一心の許可なく使用できないようにすることや、神勅により女人禁制であること（但し、一週間以上潔斎した信者はこの限りではない）なども記されている。また、普寛の神勅には、「佛窟向ツテ左ノ岩間ヨリ滴ス御神水ハ薬師瑠璃光如来御授与ノ御慈悲ナリ如何ナル難治眼病モ即座ニ治ス」、「佛窟向ツテ左に降下シ數十間行キタル所ニ社祠アリ日光佛月光佛御鎮座其下ヨリ神水湧出ス胃病第一トシテ諸病ノ効験著大ナリ」、そしてこれを「製薬者ニ此水ヲ用ユベキ宣傳セラレヨ」とあったという。ただ、高針心願講の当代先達であり、平成末にこの佛窟の再興を目指し、再興委員会の代表も務めた大鐘和久によれば、御神水が湧出している場所はいまも特定されていないという[16]。

現在、高針心願講では、平成末の再興以降、五月二十二、二十三日に講社で佛窟掃除と慰霊大祭をおこない、コロナ禍での令和三年にも感染に配慮しながら執行された。

おわりに――高針心願講の現況

以上、御嶽講の心願講に属する高針心願講の歴史について、同講に所蔵されている史料から明らかにしてきた。万延元年に開山された、心願講最大の拠点である岩崎御嶽山と至近にあり、岩崎との関係は持ちつつも、同時に初代先達の浅井勝次郎（寛開霊神）が、心願講心巴講を主管した林一心に師事したことから、林一心からの行法の影響を強く受けた。

現在、高針心願講では、第四代先達を務める大鐘和久によって、一心伝授の星祭をはじめ、四十近い年中行事がなされている。高針御嶽山での春季・秋季の季節の大祭はもちろん、心願講の拠点である岩崎御嶽山や岩作御嶽山などでも季節の大祭をおこなっている。また、高帝龍王神

や白美龍神社など、名東区内に祀られた複数の社で祭祀を続けている。

大正十年（一九二一）に立講された高針心願講は、令和三年（二〇二一）、立講百周年を迎えた。十一月には、百周年を記念した三十八年ぶりの火渡りの催行があった。高針の氏神である高牟神社に名東区内外から約八〇〇人の参加者があり、盛大に行われた。心願講の枝講の一つという組織でありながら、貴重な史料を多数所蔵し、尾張の心願講の歴史を今に伝える重要な講社である。今後も資料の分析を継続的に進めていきたい。

注

（1）関敦啓が「在俗行者の行法―尾張における儀覚系御嶽講を例に―」『山岳修験』三九号、二〇〇七年、同「在俗行者の系譜と里山霊場の存在形態―尾張の御嶽講を例に―」『山岳修験』第四二号、二〇〇八年において、名古屋熱田の儀覚から東海地方に広まった普寛系の御嶽講を「儀覚系御嶽講」と呼称し、その後、御嶽講研究において定着している。

（2）明心の子孫である倉知茂明氏宅に所蔵されており、奥書に「心願講大先達　名古屋市中區門前町　倉知茂兵衛正心　大正三年九月」とある。正心は明心の子で明心の後を継ぎ心願講大社長を務めた。

（3）『岩崎御嶽山縁起』には、その霊夢をどこで受けたかについては記載されていないが、心願講内での伝承では、結願霊場の谷汲山華厳寺（岐阜県揖斐川町）であるとされている。

（4）『立講九十周年記念　高針心願講縁起』二〇一二年、五頁。

（5）津田正生『尾張国地名考』一一八頁、一九一六年。

（6）樋口好古『尾張徇行記』一一九オ丁、一八二二年。

（7）小林元『猪高村物語』一九八八年、二六頁―二七頁。

（8）親鸞山は名古屋市守山区の東谷山（一九八㍍）に続く、名古屋市内で二番目に標高が高い。

（9）「高針御嶽山開設の事」「綴壱」と付された史料。

尾張の御嶽講・高針心願講の歴史と現在（小林）

（10）「綴貳」と付された史料。

（11）『立講九十周年記念　高針心願講縁起』二〇一二年、七頁。

（12）『立講九十周年記念　高針心願講縁起』二〇一二年、八頁。

（13）現在、高針心願講が所蔵する縁由は、林一心自身が所持していた一巻である。

（14）関敦啓「御嶽講の行法にまつわる帰属意識―行者周辺からの考察―」長谷部八朗編著『「講」研究の可能性』慶友社、二〇一三年、一三八―一八〇頁。

（15）関敦啓、前掲書、一四九―一五〇頁。

（16）「佛窟由緒のご案内―佛窟のご利益と佛窟開創縁由―」（パンフレット）佛窟霊場再興委員会・大鐘和久、二〇一七年。